

## 第1章 はじめに

発展や進歩ということばは価値用語である。つまり、単なる状態変化を表すのにとどまらず、それ自体が望ましいことであり、皆が追求することが望ましいと呼びかけることばである。第二次大戦後、わが国はこのような発展や進歩の価値を総体としてほとんど無条件に受け入れてきた。もちろん環境問題や過剰労働、階層格差の問題や自殺の多さなど産業発展や国土開発の負の側面は重大な社会問題として深刻に受け止められてきた。そして、「あまりにも急激な発展や進歩」はそれ自体が問題であるとして、見直しの対象にもされてきた。だが、1973年のオイルショック以降、1980年代終盤から90年代の初めにかけての「バブル経済」と称されるジョークのような数年を経て、経済を主な指標とした発展や進歩が必ずしも自明の前提ではないというごく当たり前のことに気がつくまで、われわれは発展や進歩という価値そのものについてはじっくり考えてみる機会を持たなかったように思われる。

考えてみれば、発展や進歩という概念は生活者にとってみれば微妙にアンビバレントな概念である。たしかに、経済の発展や国土の造り替え事業に代表される発展や進歩は未来に（その未来がどのようなものであるかについてだれもはっきりしたことがいえなかったにかかわらず）なにがしかの希望を与えてきた面はある。しかし、そのような希望は他方で、今われわれが生きているこの現在をつねに未来にいたる通過点としての地位に押しとどめ、そのため、現在が充実していることの意義を軽視することになったこともまたたしかであろう。

1990年代を「失われた10年」と言う人がいる。経済がこれまでのようにつねに右肩上がりであることができなかったことを称してそのように言うのであるが、また逆にそのような状態をもって、現在のわが国を「成熟した社会」と言う人もある。どの時点における現在もつねに途上としてしかとらえられないような社会を、われわれはとても「成熟した社会」とは呼ぶことはできないが、「成熟した社会」について考えることができるような社会状況になったということはできるかもしれない。その意味で、「失われた10年」は、社会の成熟とは何か、人生の豊かさとは何かを考えるための胚胎期間であったとも言える。

共同研究「〈成熟〉概念の社会学的研究」はそうした認識を共有する4人が、これまでそれぞれの領域で積み重ねてきた研究をもとに、社会の〈成熟〉について考察したものである。

第2章 「成熟」社会における個人の〈成熟〉はもっぱら理論的な関心から、今日の社

会的現実の多層的な混迷を、成熟概念を手がかりにして読み解こうとする。生物的成長とも社会的一人前という物言いとも異なる人間の〈成熟〉は、社会の「成熟」の単純な反映ではない。それどころか両者は、理論的には相互に別次元のものとして捉えられる。さらに社会と心をシステム論的に論じる場合、成熟という概念自体が成立しえないことになる。ここでは、現代社会と現代人が遭遇している成熟概念をめぐるこうした困難さと、成熟／未熟の枠組みで社会と個人を記述することのパラドクスをたしかめながら、それでもなお人間の自己社会化過程における成熟物語の再生の可能性を、希望とともに語りうるための条件を提示する。

第3章「教育と暴力」再考」は、過去実際にあったヨットスクール事件を題材に、教育と暴力について考察する。戦後教育思想は教育が暴力と手を結ぶようなことがあってはならないと主張し、それでも頻発する教育現場における体罰に対して非難の声をあげてきた。一方でカリスマ的素質に依存しないためのシステム化を進めることによって、暴力を教育から排除しようともしてきた。しかし、暴力に対するそうした非難とシステム化の結果、われわれは教育がそもそも暴力的な営みであることを忘れてしまったのではないか。またそうした忘却が教育の目的と方法とともに個人の利益獲得のための手段におとしめている可能性についても考察する。

第4章「自伝的エピソード記憶の再生における個人差について」では、自伝的エピソード記憶の再生における個人差を実験的にたしかめ、自伝的記憶に関する議論の手がかりを提供する。自伝的記憶の問題が重要なのは、なにも高齢者に限らない。現在を未来への踏み石としてとらえる社会は、人間の価値を、各個人の残された未来時間の長さによって測る傾向をもっている。そのような社会が高齢者によって原理的に快適であるはずがないが、残された未来時間が時の経過とともに減少するのはすべての個人に共通である。それに対し、個人の充実感が過去の記憶の蓄積に支えられるとしたら、個人が現在あることの価値は、たんに過去の時間の長さだけではなく、これから行うことのやがて記憶にとどめられるはずの意味によっても支えられることになる。このように現在の充実が過去からも未来からも支えられうるような社会的な価値観はどのように創造できるだろうか。そうした議論に記憶の基本的性質の研究は欠かせない。まず今回は、自己のアイデンティティにかかわる自伝的エピソード記憶の再生に及ぼす影響のうち、性差と抑うつ気分について考察を行う。

第5章「震災復興政策の成熟にむけて」では、個人化したライフスタイルがもたらすリスクについて考察し、対策を提言する。阪神・淡路大震災からの復興過程で問題となった

孤独死を初めとする種々の問題は、単に震災復興に伴う問題というよりは、むしろ個人化したライフスタイルを余儀なくされたことに伴う問題であったといえる。そうした問題に対処するには、災害復興住宅を単なる「ハコもの」としてとらえるのではなく、集合住宅に社会サービスをリンクしたうえで、個と個が交わり合う「共生」コミュニティのための素材としてとらえる必要がある。災害復興の成熟のためには、単にモノだけではなく、人と人とのつながりを視野に入れた社会関係資本を構築することの必要性を提言する。

「社会の成熟について考える」という構想の大きさからすれば、4人の研究者による第2章から第5章にわたる論考もごく限られた視点を提供しているにすぎない。そのことを承知の上で、しかし、まずはこのようなかたちで議論を開始することに意義があると考えている。批判を含め、これをきっかけとして議論が継続してゆくことを望みたい。